

四、六週間の恐怖

日本軍が城門を突破したときには、ある程度の財産、権力、または見通しを持っていた住民たちはみな、すでに都市を去り、どこかに行つてしまつていた。元の人口の約半分が避難した。つまり、戦争の前には都市固有の人口は一〇〇万人を超えていたから、それは一二月に半分の五〇万人にまで減少していったということになる。しかし都市には、城壁の内部は安全であると信じて自分たちの家を後にして入城した周辺地域からの数十万人の避難民があふれていた。兵士たちが去つた後に残つた人々は、自分たちを護る能力に最も乏しい人たちでもあつた。つまり、子どもや老人、あるいは、あまりに貧しいか、あまりに病弱なため、都市からの脱出の手段を確保できない人々だつた。

防御のすべがなく、人的資源もなく、何の方策もない人々ができたのは、日本人が彼らによくしてくれるのではないかという希望をもつことだけだつた。多くの人が自分たちに言い聞かせただろう。戦いが終われば、もちろん日本軍は自分たちを丁重に扱うだろう。いずれにしても、日本軍は彼ら自身の政府よりもよい支配者ではないか。明らかに、彼らの政府は、彼らが最も必要としていたときに彼らを捨てたのだから。こういうふう信じ込む人たちもいたかもしれない。実際に、日本の侵略者が戦車や大

砲やトラックとともに、大挙して市内に入り込んできたときには、砲火に倦み、爆撃に倦み、包囲に倦んだ中国人のグループが歓迎に出迎えようと集まった。あるものは窓から日章旗を下げ、あるものは南側と西側の城門を通って行進する日本軍の隊列に向けて喝采した。

しかし、歓迎ムードは瞬く間に消え去った。後年の目撃者の証言によれば、日本兵は入城直後から、六人から一二人ほどの集団で街を歩き回り、目についた人に向けて見境なく発砲した。舗道にはうつ伏せに倒れている老人が見つかったが、ほんの気紛れによつて彼が背中から撃たれたことは明らかだった。中国人の民間人の死体がほとんど、いたるところに、横たわつていた。多くは、近づいてくる日本兵から逃れようと走り去つた以外に、日本兵の氣に障るようなことは何もしていなかつた。

戦争犯罪の裁判記録や中国政府の文書で次々に事件を見ていくと、多くは類型的で、その恐怖の程度にいたるまでほとんど単調にさえ感じられる。それぞれに多少の相違点があるが、筋書きは大体、次のように進行する。

日本兵は目にした男をだれかれとなく捕虜として拘束し、何日もの間、食事と水も与えず、しかし、食事と水を与える約束だけはする。そのような待遇のまま数日間が過ぎたころ、これらの犠牲者たちの手首をしつかりと縄や針金で縛り、ある隔離された地域に追い立てる。余りにも疲れきり、脱水状態になった男たちは、食事が与えられると思つて必死になつて歩いていく。機関銃や兵士たちが振り回す血まみれの軍刀や銃剣、大きな墓穴、その中に前に連れてこられた人々の死体が積み重なり、悪臭を発しているのを彼らが見たときには、すでに逃げるには遅すぎた。

後に日本人は、供給が限られている自分たち用の食料を節約するため、あるいは反乱を防ぐために捕

虜を処刑しなければならなかったといつて、これらの行為を正当化した。しかし、日本人が南京の救いのない何十万人もの中国の民間人に対して行ったことには、どのような言い訳も成り立たない。彼らは何の武器も持っていなかったし、反抗する立場にもいなかった。

もちろん、南京のすべての中国人がやすやすと絶滅処置に身を委ねたわけではない。南京大虐殺は、犠牲者になった多数の人々の物語であるとともに、個人の奮闘と勇気の物語でもあった。そこには、浅い墓穴で、手で脱出路を掘った男たちがいて、凍りつく揚子江で何時間もの間、葦にしがみついていた男たちがいて、友人たちの死体の下に何日間も埋められていた後に、銃弾を受けた体を引き摺って病院にたどり着いた男たちがいた。彼らを支えていたのは、生きのびようとする粘り強い意思だけだった。穴や堀の中に何週間も潜んでいた女性たちや、子どもを救おうと燃え盛る家の中を駆け抜けた女性たちがいた。

後に、これらの生存者の多くは、彼らの体験を記者や歴史家に語り、日本の敗北後に南京と東京で開かれた戦争犯罪裁判で証言した。一九九五年の夏に彼らの何人かにインタビューしたとき、私は日本軍による中国人の被害者たちの多くが単なる娯楽目的で殺害されたのだということを知った。南京の住民で、現在八〇歳代になる唐順山タンシュンサンは、一九三七年の日本軍の殺人コンテストを奇跡的に生き残った。彼の見たものはまさにそれを物語っている。

殺人コンテスト

爆撃で家を失い、南京の街路上で難渋した何千人もの不幸な市民たちとは異なり、南京大虐殺の時期

の唐には、実際には安全な避難場所があった。当時、二五歳の靴職人の徒弟だった唐は、市北部の小さな街路小門口にあった同僚の徒弟の家に隠れていた。彼の同僚（唐は「大和尚」と「小和尚」と呼んでいた）は、家の入口から門を取り除き、空いた部分に煉瓦を詰めて外側から見ると壁が切れ目なく続いているようにカモフラージュしていた。数時間、彼らは家の土間に座り、外の叫び声と銃声を聞いていた。唐が突然その目で日本兵を見たいという思いに駆り立てられたとき、彼の受難が始まった。そのときまで、彼はずっと日本人の外見は中国人に似ていると聞いていたが、日本人を実際に見たことがなかった。そのとき、その真偽を確かめることができなかつた。そのときこそ、その眼で日本人を見る千載一遇の機会だった。唐は好奇心を抑制しようとしたが、それに打ち勝つことができなかつた。彼は友人たちに、入口の煉瓦を取り除いて外に出してくれるように頼んだ。

当然、友人たちは、唐が外をうろついているのを日本軍が捕まえたなら、必ず、唐を殺すだろうと警告して、外に出ないように説得した。しかし、唐は容易には説き伏せられなかつた。大和尚と小和尚は必死になって思いとどまらせようとしたが、最後には彼の決心を変えさせることをあきらめた。彼らは自分たち自身を危険にさらして、門の煉瓦を取り除き、唐を外に出した。

唐が外に出るや、彼はもう後悔し始めた。ほとんど超現実的な戦慄の光景が彼を捕らえた。彼は、眼前の街路に、男の死体、女の死体、あるいは子どもや老人の死体が散乱しているのを見た。ほとんどの死体は銃剣などで突き殺されたものだった。「どこもどこも血だらけだった」。唐は恐怖の午後を思い出した。「まるで、空から血が降ってきたようだった」。

そのとき、彼は通りにもう一人の中国人がいて、その後ろに少し離れて、八、九人の日本兵の集団が

近づいてくるのを見た。彼とその見知らぬ中国人は本能的に近くのごみくずの箱に飛び込み、藁と紙を頭にかぶせた。寒さと恐怖で彼らが震えると、箱も彼らと共に左右に震えた。

突然、藁が叩き落された。一人の日本兵が頭上にぬつと顔を出し、彼らをにらむや、起こったことを唐が完全に理解する前に、横にいた人間の首を刀で斬り落した。犠牲者の頸部から血がほとばしり出て、日本兵は落とされた首を戦利品のようにつかみ上げた。「私は恐怖の余り動くことも考えることもできなかった」。唐は思い出した。「私は思った。もし私がここで死んだら、私の家族たちは私に何が起こったかを知ることができないだろう」。

そのとき、彼は中国人の声が彼に命令するのを聞いた。「滾去来クンチュエライ（出て来い）」。唐は、大声を出した中国人が日本人への裏切り者（漢奸）だろうと推測した。「滾去来クンチュエライ。そうしなければおまえを殺すぞ！」

唐はごみくずの箱から這い出た。道の横の堀を見て、この中に飛び込んで逃亡することができないかなと考えたが、恐怖のために脚がすくんで動くこともできなかった。唐は街路で日本兵の集団が数百人の中国人を集め、追い立てているのを見た。唐はその中国人の群れに加わるよう命令された。他の捕虜たちと行進していくとき、彼は道の両側に死体が散乱しているのを見て、余りにも惨めな気持ちになり、自ら死を願うほどだった。

しばらくして、唐は池と真新しく掘られた壕の近くに立たされた。壕は六〇人ほどの中国人の死体が埋まった四角い穴だった。「新しく掘られた穴を見たとき、私は彼らが私たちを生き埋めにするのか、あるいはすぐに殺すのだろうと考えた。恐怖の余り身動きもできず、私はじっと立っていた。突然、私は壕の中に飛び込んでしまおうかなと思った。しかし、そこに狼のような日本の軍用犬が二頭、死体を食べ

ているのを見た」。

日本兵は唐と他の捕虜たちに、大きな墓穴の両側に整列するよう命令した。彼は縁に近い場所に立った。九人の日本兵が近くで待っていた。日本兵は黄色い軍服を着て、星の徽章のついた帽子をかぶり、輝く銃剣と小銃を手にしていた。間近に見た日本人は確かに中国人とよく似ていたが、そのときの唐は恐怖に駆られていて、この点を思い起こすことはなかった。

それから、日本兵の間で競争が始まり、唐に戦慄が走った。誰が最も速く殺せるかを決める競争である。一人の兵士が機関銃の前で逃亡する者を撃ち殺そうと見張り役を務め、他の八人が二人ずつに分かれて四組のチームになった。それぞれのチームで、一人の兵士が刀で捕虜の首を斬り落とし、もう一人が首を拾い上げて傍らに積み上げた。捕虜たちは彼らの同朋が一人一人殺されている横で、沈黙と恐怖の中に凍りついていた。「殺して、数えて！ 殺して、数えて！」。唐は屠殺の速度を思い出しながら語った。日本人は笑っていた。写真を撮っているものさえいた。「自責の念を示すものは何もなかった」。

深い悲しみが唐の心を襲った。「逃げる場所はなかった。私は死ぬしかなかった」。そのとき彼は、彼の家族と愛する人たちを思い、その人たちは自分に何が起こったのかを永遠に知ることができないだろうと感じた。

そのような考えに耽^{ふけ}っていたとき、騒ぎが始まって、唐は現実に戻された。二列前にいた妊婦が、列から彼女を引き摺り出して強姦しようとした兵士をかきむしって自分の命を護るための絶望的な闘いを始めた。彼女を助けようとするものはなく、結局、兵士は彼女を殺し、彼女の腹部を銃剣で切り裂いて彼女の腸だけでなく身もだえする胎児をも引き摺り出した。あのときにこそ、全員で反抗すべきだった。

唐は考える。何かできることをして、闘つて、たとえ自分たちがすべて死んでも、兵士を殺そうとすべ
きだった。しかし、中国人の捕虜の数は自分たちを苦しめる日本人の数を大きく上回つていて、彼ら
を圧倒することができたかもしれないのに、誰も動かなかつた。誰もが不気味なほどの従順さを保つて
いた。悲しいことだが、壕の周りのすべての人々の中で、ほんのわずかな勇気を示したのはあの妊娠した
女性だけだったのである。唐は述懐した。

やがて、軍刀を振り回す日本兵が唐の間近で自分の作業に専念し、唐の前には一列が残されるだけ
になつた。そのとき、奇跡としか言えない幸運が彼に訪れた。兵士が彼の直前にいた男の首を斬り
落したとき、犠牲者の身体が唐の肩に倒れかかつた。死体の倒れるはずみで、唐も後ろに倒れ、死体と
一緒に穴の中に落ちた。それに気づいたものはいなかつた。

唐は死体の衣服の下に頭を隠した。彼の策略は、もし日本兵が元の首斬りゲームに固執していたら役
に立たなかつただろう。初めの頃、兵士たちは犠牲者たちの首で点数を数えていた。しかし、後になる
と時間を節約するために、彼らは首を斬り落とすことによつて殺すのではなく、喉を突き刺して殺すよ
うになつた。これが唐を救うことになつた。事実、壕の中には首が完全に胴体についている何十体もの
死体が積み重なつていた。

殺人の狂騒は一時間ほど続いた。唐が死んだふりをして倒れていると、日本兵は残りの死体を押して
彼の上に落とした。唐の記憶によれば、それから、ほとんどの兵士がその場を去つたが、一人の兵士だ
けが残つて、全員が死んでいることを確かめるために銃剣で何度も大きな墓穴を突き刺して回つた。唐
は銃剣で五回、突き刺されたが声を上げず、そのまま気絶してしまつた。

その日の午後五時頃に、唐の同僚の徒弟の大和尚と小和尚が、彼の死体を見つけられないかと濠にやってきた。煉瓦の隙間から、彼らは日本兵が唐たちを集めて連れて行くのを見て、他の人たちとともに唐が死んだと考えていた。しかし、彼らは死体の山の下で動いている唐を見つけ、すぐに彼を引き上げて自分たちの家に連れ戻した。

その日の殺人競争で何百人もの人々が死に、生き残ったのは唐だけだった。

拷問

日本軍が南京の住民に苦痛を与えるために行った拷問は、ほとんど人間の理解の限界を超えたものである。ここでは、少数の例のみを示す。

——生き埋め 日本軍は、流れ作業の精度と効率で生き埋め作戦を指揮した。兵士たちは捕らえた中国人のひとつの集団に墓穴を掘るように命じ、二番目の集団に最初の集団を埋めさせる。三番目の集団に二番目の集団を埋めさせ、以下同様となる。犠牲者の中には胸や頸を部分的に埋められたものもいたが、彼らはさらに激しい苦痛を強いられた。たとえば、刀で切り刻まれたり、馬や戦車で踏みつけられたりした。

——切断 日本人は、腹を切り裂いて内臓を取り出し、首を斬り落し、腕や脚を切断したが、それだけでなく、被害者をもっと苦しめるさまざまな拷問を行った。市内の至る所で、彼らは捕虜を木製の板の釘付けにして、戦車で轢いた。捕虜たちを樹木や電柱に磔にして、長い肉片を切り取り、あるいは銃剣の練習台として使用した。少なくとも一〇〇名の男たちが、焼き殺される前に眼をえぐり取られ、

鼻と耳を切り取られた。他の二〇〇名の中国兵と民間人の集団は、裸にされ、学校の門に列になつて縛られ、十字という取つ手のある特殊な鉤で、口や喉や眼などの身体中の何百もの箇所を突き刺された。

——火による死 日本人は膨大な人数の犠牲者を大量に焼却した。下関では、日本兵は中国人捕虜を一〇人ずつ縛つて、穴の中に突き落としガソリンをかけて火をつけた。太平路では、多数の商店の店員に火事を消すように命じ、次に彼らを互いに縄で縛つて炎に投げ入れた。日本兵は火によるゲームを考案しさえしている。余興の方法のひとつは、建物の最上階や屋根に多数の中国人の集団を追いやり、階段を破壊し、下層階に火を放つというものだった。その犠牲者の多くは、窓や屋上から飛び降りて自殺した。別の慰みの方式は、犠牲者たちを燃料で浸し、彼らに向けて射撃して、炎が燃え上がるのを見物するというものだった。ある有名な事件では、日本兵が数百人の男女と子どもたちを広場に追い立て、ガソリンを浸し、機関銃で発火させた。

——水による死 南京大虐殺の時には、何千もの犠牲者が意図的に凍死させられた。たとえば、日本兵は数百人の中国人捕虜を凍結した池の縁に行進させ、彼らはそこで裸になり、水を割つて、水に飛び込んで「魚を取る」ことを命令された。彼らの身体は硬直して浮いた標的になり、たちまち日本軍の銃弾でこなごなにされた。別の事件では、日本人は避難民の集団を縛り上げ、彼らを浅い池に放り込み、手榴弾で爆破して「血と肉の雨」を降らせた。

——犬による死 ひとつの悪魔的な拷問方法は、被害者の腰までを埋めて、彼らがシェパード犬に引き裂かれるのを見物するというものだった。目撃者は、日本兵が犠牲者を裸にして、彼の身体を感じやすい部分にシェパード犬をけしかけて噛みつかせたのを見た。何匹もの犬は彼の腹部を引き裂いただけ

でなく、彼の腸を遠くまで引き摺り出した。

ここで述べた出来事は、日本人が被害者を苦しめるために使用した方法の一部分でしかない。日本人は犠牲者を酸に浸し、幼児を銃剣で突き刺し、人々を舌で吊り上げた。後に南京大虐殺を調査した日本の記者は、少なくとも一人の日本兵が犠牲者の心臓と肝臓を抉り出して食べたことを知った。生殖器さえも消費された。日本人の監禁から逃れた中国兵は、街路に幾つかのペニスを切り取られた死体があるのを見た。後に彼は、ペニスを食べるることによつて精力を増強することができると信じている日本人の顧客に売却されるのだと聞いた。

強姦

南京で行われた処刑の規模と性質は我々には理解しがたいものだが、強姦の規模と性質についても同様である。

それは、確実に歴史上最大の大規模な強姦のひとつである。Against Our Will: Men, Women and Rape (意思に反して—男、女そして強姦)という画期的な書物を書いたスーザン・ブラウンミラーは、南京大虐殺はおそらく戦時に民間人に対して加えられた最悪の強姦の事例であろうと信じている。唯一の例外は、一九七一年のパキスタン兵によるベンガル人女性に対する扱いである(反乱失敗後の九ヶ月間の恐怖政治の時期に、バンングラディッシュで二〇万人から四〇万人の女性が強姦されたと推定されている)。ボスニアの強姦は、統計の信頼性が欠如しているために、確かなことを語るのは難しいといながらも、ブラウンミラーは、南京大虐殺が旧ユーゴスラビアにおける女性たちの強姦の規模を上回っているのでは

ないかと考えている。

南京で強姦された女性の正確な人数を確定することは不可能である。推定値は最小の二万人から最大の八万人までの範囲に広がる。しかし、日本人が南京の女性に対して行ったことを、統計の計数表によって計算することはできない。試練に耐えて生き残った女性たちの多くは、後に妊娠していることに気づいた。南京で日本の強姦者によって妊娠させられた中国人女性の問題はあまりにも過敏なものであったために、これまで完全に研究されたことがなかった。したがって、この問題の心理的な被害の全体像を知ることが、永久にできないだろう。私の知る限り、そして中国の歴史家と南京大虐殺を記念して建てられた記念館の職員の知る限り、今日まで、自分の子どもが強姦の結果だったということを表立って認めた女性は一人もいない。そのような子どもたちのほとんどは、こっそりと殺された。大虐殺当時に市内にいたアメリカの社会学者によれば、多数の日本の混血児が、産まれたときに窒息死させられ、溺死させられたという。中国人の女性が、愛することのできない子どもを育てるのか、嬰兒殺しを犯すのかという選択を迫られたときに負わされた罪悪感、羞恥心、そして自己嫌悪がどのようなものだったかについては、想像するしかない。疑いもなく、多数の女性たちは決断を下すことができなかった。あるドイツの外交官は、一九三七年から一九三八年にかけて、「数えきれない」中国人女性が揚子江に投身して自らの生命を断つたと報告した。

しかし当時の南京では、いとも容易く強姦の被害者になったのだということは、疑うべくもない事実である。日本人は南京のあらゆる階層の女性を強姦した。対象は農民の妻、学生、教師、ホワイトカラーおよびブルーカラーの労働者、YMCA職員の妻、大学教授から、仏教の尼僧にまでもおよんだ。ある

ものは輪姦されて死んだ。また、彼らの女性狩りは組織的、系統的だった。南京の日本兵は、家に押し入って男を引き摺り出して処刑するときに、絶えず女性を漁っていた。あるものは文字通り一軒一軒の搜索を行い、金銭と「花姑娘」^{ホウクイニヤ}つまり若い娘を要求した。

このため市内の若い女性たちは、恐ろしいジレンマに陥った。彼女たちは、家の中に止まるのか、それとも欧米人によつて護られている中立地域の国際安全区に避難するのか決めることができなかった。家にいれば家族の目の前で強姦される危険にさらされた。しかし、安全区に向かつて家を出れば、通りで日本兵につかまる危険があつた。南京の女性にとつて、至るところに罠が隠されていた。たとえば、日本軍は市場で女性に米と小麦を鶏と家鴨に交換するという話をでつちあげた。しかし、女性たちが交換のためにその場所に着いたとき、彼女たちが見たのは待機している一団の兵士たちだった。兵士たちの一部は中国人の裏切り者を雇つて、強姦用の候補者を探し回つた。日本人は、安全区の中でさえ、事件を偽装して難民キャンプから外国人をおびき出し、女性たちを拉致の襲撃から無防備な状態にしようとした。

中国人の女性にはあらゆる場所で、あらゆる時間に、強姦された。強姦事件の三分の一は日中に発生したと推定されている。ある生存者は、明るい日差しの中で、通りの真中で、多くの目撃者の眼前で、兵士たちが被害者を犯すために脚をひろげさせてのぞきこんだことまでを思い出す。神聖な場所だからといって強姦が妨げられることはなかった。日本人は、尼僧院の中で、教会の中で、あるいは神学校の中で女性を襲つた。神学校の敷地内で、一七人の兵士が次々と一人の女性を強姦した。「大公報」紙は、南京の大規模な強姦を証言した。「毎日、一日二四時間、どこかで罪のない女性が日本兵によつて引き摺り

出されていない時間はなかった」。

老齢も日本人の気にするものではなかった。年配の婦人が、おばあさんが、そしてひいおばあさんが、度重なる性的な襲撃を受けた。六〇歳の女性を強姦した日本兵は、「口でペニスを洗う」ように強制した。六二歳の女性が兵士たちに、自分は歳を取っているので性交はできないと抗議したところ、彼らは「彼女に棒を突き刺した」。八〇歳代の多数の女性が強姦されて死に、少なくともその年齢の一人の女性が日本兵が言い寄るのを拒絶したために射殺された。

日本人の老婦人に対する扱いが恐ろしいものだったとすると、彼らの幼女に対する扱いは信じがたいものだった。幼い少女たちは乱暴に強姦され、あるものは何週間もの間、歩くことができなかった。多くのものは手術の治療が必要で、他のものは死んだ。中国人の目撃者は、日本人が一〇歳に満たない少女を街路上で強姦してから、刀で二つに切り割いたのを見た。ある事例では、日本人は強姦を効果的に行うために、一〇歳に満たない少女のヴァギナを切り開いた。

妊娠後期の女性でも襲撃を免除されることはなかった。日本人は、陣痛が始まろうとしている女性、陣痛が始まっている女性、あるいは僅か数日前に出産したばかりの多数の女性たちに暴行を加えた。九ヶ月の身重だった一人の被害者は、流産しただけでなく完全に正気を失った。少なくとも一人の身重の女性が、蹴られて死亡した。それ以上におどましいのは、これらの女性の未だ産まれていない子どもたちの何人かに加えられた行為である。輪姦の後、ときに日本兵たちは、娯楽のために、妊娠した女性の腹を切り裂いて胎児を引き出した。

しばしば、女性の強姦は家族全員の虐殺を伴った。

その種の虐殺の最も有名な物語は、南京のアメリカ人とヨーロッパ人の宣教師たちによって詳細に記録されている。一九三七年一月一日に、三〇人の日本兵が南京市東南部新路口五号の中国人の家に来た。彼らは門を開けた家主を殺し、次に跪いてもう誰も殺さないように懇願する借家人の夏シャ氏を殺した。家主の妻が、なぜ夫を殺したのかと抗議したときに、彼らは彼女を射殺した。次に兵士たちは、客室のテーブルの下から、一歳になる自分の子どもを隠そうとしていた夏氏の夫人を引き摺り出した。彼らは夫人を裸にして強姦し、ことが終わつた後に胸を銃剣で突いた。兵士たちは夫人のヴァギナに香水の瓶を突き刺し、嬰兒も銃剣で殺した。次に、彼らは隣の部屋に行つて、夏氏の父母と二人の一〇代の娘を見つけた。祖母は少女たちを強姦から護ろうとして拳銃で撃たれ、妻の体を抱きしめていた祖父も直後に殺された。

その後、兵士たちは少女を裸にして、強姦し始めた。一六歳の少女は二人または三人の男に犯され、一四歳の少女は三人に犯された。日本人は年上の少女を刺し殺しただけでなく、強姦の後で彼女のヴァギナに竹の棒を突き刺した。年少の少女は銃剣で突き殺されただけだったので、「彼女の母と姉が受けた恐ろしい仕打ちを免れることができた」。後にある外国人が、その場面について書いている。兵士たちはベッドの毛布の下に四歳の妹と一緒に隠れていた八歳の少女にも銃剣を突き刺した。四歳の少女は長時間毛布の下に隠れていて、窒息寸前になった。彼女は酸素の欠乏により、一生涯続く脳の損傷を受けた。

立ち去る前に兵士たちは、四歳と二歳になる家主の二人の子どもを殺した。彼らは年上の子どもを銃剣で刺し殺し、年下の子どもの首を刀で切り落とした。子どもたちが外に出ても安全になつたときに、

ベッドの毛布の下に隠れていて生き残った八歳の少女は隣の部屋に這い出て、彼女の母親の死体の傍らに横たわった。四歳の妹と共に、彼女は一四日の間、襲撃の前に母親が用意していた米糠を食べて生きた。惨劇の数週間後に国際委員会の一人のメンバーが家を訪れたとき、彼はテーブルの上で若い少女が強姦された形跡を見た。のちに彼は証言した。「私がそこに行つたとき、テーブルの血はまだ乾いていなかった」。

目の前で家族全員を殺された一五歳の中国人少女に関する、おぞましきでは劣ることのない同じような物語がある。最初、日本人は中国人兵士であると誤認して、彼女の兄を殺し、次に兄の妻と彼女の姉を、強姦に抵抗したという理由で殺し、最後に、床に跪いて日本兵に子どもたちの生命を救ってくれるよう懇願していた彼女の父親と母親を殺した。日本人の銃剣で突かれて死ぬ前の両親の言葉は、若い少女に敵兵の望むものに何でも従うように促すものだった。

少女は気絶した。意識を取り戻したとき、彼女は見知らぬ施錠された部屋の床に裸で寝かされていた。彼女が意識を失っている間に、誰かが彼女を強姦していた。彼女の衣服は、その建物のほかの少女たちと同じように、彼女から剥ぎ取られていた。彼女の部屋は二〇〇人の日本兵の兵舎に転用されていた建物の二階にあった。内部にいた女性たちは二種類のグループから構成されていた。ひとつは売春婦で、彼女らは自由を保証されよい待遇を受けていた。もうひとつのグループは、拉致されて性奴隷にされた育ちのよい少女たちだった。後者のグループの、少なくとも一人の少女が自殺を試みた。一カ月半の間、一五歳の少女は一日に二回から三回ずつ強姦されつづけた。最後に、彼女は重い病気になったため日本人は彼女を一人にして放置した。ある日、中国語を話す親切な日本人将校が彼女に近づき、なぜ泣いて

いるのか尋ねた。彼女の話を聞いた後、彼は自動車で彼女を南京に連れて行き、南門の内側で彼女を解放し、紙片に金陵学院の名前を書いて彼女に手渡した。少女は病気が重かったので、最初の日に金陵学院まで歩いていくことができず、中国人の家に避難した。二日目によく金陵にたどり着いたとき、国際委員会のメンバーが急いで駆けつけて、彼女を病院に運んだ。

この少女は幸運だと思われた。恒常的な強姦の用具として、裸にされ、椅子やベッドや柱に鎖でつながれていた、ほかの多数の少女たちは、そのような仕打ちに耐えて生き残ることはできなかった。中国人の証言は、二日の間連続して強姦され続けた後に死んだ一歳の少女の死体を、次のように描写している。「目撃者の報告によれば、血が染みて、腫れ上がり、裂傷を負った少女の脚の間の光景は胸が悪くなるもので、誰も容易に正視できなかった」。

大規模な強姦のときに、日本人は、目の前にいたという理由で子どもや幼児たちを殺した。目撃者の報告は、母親が強姦されている前で泣いたという理由で、子どもや嬰兒たちが口に衣服を詰め込んで窒息させられ、あるいは銃剣で刺し殺された状況を描写している。南京大虐殺の欧米人の目撃者たちは、次のような膨大な件数の事例を記録している。「四一五——二月三日午後五時ごろ。尚書巷（大中橋付近）で、三人の兵士が一人の女性に無理やり嬰兒を投げ捨てさせ、彼女を強姦した後、笑いながら去っていった」。

数えきれない男たちが愛するものを強姦から護ろうとして死んだ。日本人たちが物置から一人の女性を引き摺り出し、彼女の夫が制止しようとしたときに、彼らは「彼の鼻に針金を通し、人が牛を繋ぐように針金の別の端を木に縛りつけた」。彼らは、男の母親が地面に転げまわり、ヒステリックに泣

き叫んで懇願するのを横目に、男に銃剣を繰り返し突き刺した。日本人は母親に家の中に入るよう命令し、さもなくば殺すと脅した。直後に息子は突き刺された傷のために死んだ。

南京では、人間性への墮落と性倒錯に対する日本人の許容力には限界がないようだった。兵士の一部が殺人の単調さを破るために殺人コンテストを考案したように、セックスに食傷したときに一部の兵士たちは、レクリエーション用の強姦と拷問のゲームを考案した。

多分、日本人の娯楽の最も残忍な形式のひとつは、ヴァギナを串刺しにすることだろう。南京の街路には脚を開いてその間の部分に木の棒や小枝や雑草を突き刺された女性の死体が転がっていた。南京の女性を苦しめるために使用された、それ以外の物について詳しく考察するのは苦しい。それらは、彼らにどんな耐えがたい試練を強いたのだろうか。考えるだけで精神が麻痺するほどである。たとえば、ある日本兵は若い女性を強姦した後、彼女にビール瓶を突き刺してから、射殺した。別の強姦の被害者は、ゴルフクラブの棒を突き刺されていた。一月二十二日には、通済門に近い居住区で日本兵は理髪店の妻を強姦し、彼女のヴァギナに爆竹を詰め込んだ。その爆発で、彼女は死んだ。

しかし、被害者は女性だけではなくだった。しばしば、中国人の男性は男色の対象にされ、また、哄笑する日本兵の眼前でさまざまに不愉快きわまる性行為を強制された。少なくとも一人の中国人の男性が、雪の中で女性の死体に死姦することを拒絶したために殺された。また、日本人は一生を独身で通そうと誓っている男性に性交を強制しようとするだけでも喜んだ。ある中国人の女性が男に変装して南京の城門のひとつを通ろうとしたが、通行人すべてのまたぐらを手で探って系統的に検査していた日本人の守

衛によつて、彼女の眞の性別が知られてしまった。彼女は輪姦されたが、不運なことに一人の仏教の僧侶がその場面の近くにいた。日本人は僧侶に、自分たちが強姦したばかりの女性と性交させようとした。僧侶が抵抗すると、彼らは僧侶を去勢し、出血のためにその哀れな男は死んだ。

性的な拷問の最も汚らしい例のいくつかは、家族全員を貶めようとするものだった。日本人は中国人の男性に近親相姦を強いることに嗜虐的な悦びを求めた。父親に彼自身の娘を犯させ、兄弟に姉妹を犯させ、息子に母親を犯させた。中国軍の大隊の指揮官だった郭^{クオ}岐^キは市が陥落した後の三ヶ月間、進退窮まったまま市内に残つていたが、日本人が、息子に母親を犯すよう命令した少なくとも四件または五件の事件を、見たか、あるいは聞いた。拒絶したものは即座に殺された。彼の報告はドイツの外交官の証言と符合し実証される。その証言によれば、自分の母親を強姦することを拒絶した一人の中国人男性が刀で突き殺され、彼の母親はそれからまもなく自殺したという。

いくつかの家族は、自分を自分で破壊するような行為を拒んで、潔く死を受け入れた。ある家族が揚子江を渡つていたときに、二人の日本兵が彼らを停止させ、点検を要求した。船に若い女性と少女が乗つているのを見たとき、兵士は両親と夫の目の前で彼女らを強姦した。これだけでも十分に、恐ろしいことだったが、兵士が次に家族に要求したことは彼らを打ちのめした。兵士は家族の老人が自分らと同じように女性を犯すことを望んだのである。従うことができなかつた彼ら家族全員は川に身を投げ、溺死した。

女性が日本兵に捕らえられてしまうと、もはや絶望的で、多くは強姦され、その直後に殺害された。

しかし、すべての女性がやすやすと身を委ねたわけではない。多くの女性が、何ヶ月間も日本人に見つからずに隠れていることができた。彼女らはたとえ、積み重ねた薪の間、干草の下、豚小屋の中、船の中、廃屋の中などに身を潜めた。周辺の農村では、女性たちは地下の隠された穴の中に身を潜めた。日本兵は地面を叩いて、この穴を発見しようとした。ある尼僧と幼い少女は、すでに死体で一杯になっていた壕の中に横たわり、五日間、死んだ振りをして、強姦と殺害から逃れた。

女性たちはさまざまな方法によって強姦を免れた。あるものは変装した。顔に煤を摺り込み、年若い病人に見えるようにし、あるいは頭を剃って男と思わせた（一人の賢い少女は、杖をついてよろけ、六歳の少年を背負い、老婦を装ったまま、金陵学院の安全区に入った）。あるいは、日本兵に自分は四日前に死産したばかりだと言った女性のように、病人のふりをした。別の女性は中国人の捕虜の助言を聞いて、喉に指を突っ込んで何度も嘔吐した。（彼女を捕らえた日本人は、急いで彼女を建物から追い出した）。あるものは、猛烈に追いかける日本人をかわして、人ごみに紛れ、城壁によじ登り、その速さだけで、辛うじて逃げ切った。一人の少女は、家の三階から中国人の男性が支えてくれた竹竿で滑り降りて、日本兵の裏をかき、やつとのことで襲撃を免れることができた。

捕まってしまうと、戦う女性は、他のあえて抵抗しようとする人たちへの見せしめとして、拷問されることになる。しばしば、日本兵に抗った女性は、後に眼球をえぐり出され、耳や鼻、あるいは胸を切り取られた姿で発見された。日本兵の襲撃に対して、あえて戦おうとする女性はほとんどいなかったが、それでもいくつの抵抗の例が見られる。ある学校教師は、射殺されるまでの間に五人の日本兵を銃で倒した。最も有名なのは、日本兵との戦いで三七箇所の銃剣の傷を受けながら生き残り、六〇年後になっ

でも当時の状況を身ぶりで再現しながら語るほど健康で元氣な李秀英リーシューイの物語だろう。

一九三七年当時、一八歳の李秀英は軍技術者の新妻だった。政府が首都から撤退するとき、彼女の夫は中国兵がすし詰め状態になった列車の屋根の上に座つて南京を離れた。妊娠六ヶ月あるいは七ヶ月だった李は、混み合う列車に乗るのが危険な状態だと判断されたので、あとに残ることにした。

多くの他の南京市民と同じように、李と彼女の父は外国人が管理していた安全区に避難した。彼らは難民キャンプに転用されていた小学校の地下室に隠れた。しかし、安全区の他の場所と同じように、このキャンプは度重なる日本人の視察と侵入にさらされた。二月一八日に、日本兵の一団が押し入つてきて、若い男性を学校から引き摺り出していった。翌朝、彼らは女を求めて戻つてきた。日本人が身重の主婦に対してすることに恐怖して、李は衝動的に地下室の壁に自分の頭を打ちつけ、自殺しようとした。

意識を取り戻したとき、彼女は地下室の床の小さな布製寝台の上に横たわる自分に気づいた。日本人はいなくなつたが、彼らは何人かの若い女性を連れ去つていた。寝台に茫然と横たわつている彼女の頭の中を、野性的な考えが駆け巡つた。もし建物の外に逃げようとするれば、自分から日本の強姦者に飛び込んでいくことになるかもしれない。しかし、何もせずに待つていたら、彼らはおそらく自分を狙つて戻つてくるだろう。李は待つことにした。日本人が戻つてこなければそれでよい。しかし彼らが戻つてきたら、自分は彼らと戦つて死のう。日本人に強姦されるよりも、死を選ぼう。彼女は自分に言い聞かせた。

間もなく、彼女は三人の日本兵が階段を降りて近づいてくる重い足音を聞いた。その中の二人は、二人の若い女性を確保し、必死の叫び声を上げる彼女らを部屋の外に引き摺り出していった。残りの一人は寝台に横たわつて動かない李をしげしげと見つめた。誰かが李は病氣だと言うと、彼は部屋の中の李

以外の人を蹴つて廊下に追い出した。兵士は戻ってきて、ゆっくりと彼女の品定めをするために近づいてきた。突然のことだった。兵士が何が起こったのかを理解できないうちに、彼女は動いた。彼女は寝台から飛び出し、彼のベルトから銃剣を奪い取り、壁に背を押し付けて身構えた。「兵士は動転しました」。彼女は思い出す。「彼は女が反撃してくるとは想像もしていなかったのです」。彼は、李が銃剣を持っている手首を押さえた。しかし、李は自由なほうの手で彼の襟を掴むと、彼の腕に全身の力をこめて噛みついた。兵士は完全な戦闘服を着ていて、彼女は動きにくい旗袍チヤイナドレス（チャイナドレス）だけしか着ていなかったけれども、彼女は善戦した。二人は互いにつかみ合い、蹴りあつて、とうとう兵士は敵わないと感じ、叫び声をあげて助けを求めた。

ほかの兵士たちが駆け寄ってきた。疑いもなく、彼らはそこに信じられないものを見た。彼らは彼女に銃剣を突きたてたが、同僚が邪魔になつて効果的に攻撃することができなかった。彼女の対戦者は背が低く非常に小柄だったので、彼女は完全に彼の足を封じて、彼を動かし、兵士たちの攻撃を防御する盾のように使うことができた。しかし、兵士たちは銃剣を彼女の顔に向け始め、顔を刃が切り刻み、歯を打ち砕いた。口に血が溢れ、彼女はそれを敵の眼をめがけて吐き付けた。「壁も、床も、ベッドも、どこも血だらけでした」。李は思い出した。「私の心に恐怖感はまだありませんでした。私は激怒していました。私の考えは戦つて彼らを殺すことだけでした」。最後には一人の兵士の銃剣が彼女の腹部を突き刺し、彼女の視界はすべて真っ暗になった。

兵士たちは彼女が死んだと思つて去つていった。李の身体が父親の前に運ばれたとき、父親は娘が呼吸をしているのをまったく感じることができず、最悪の事態を想定した。彼は彼女を学校の裏に運び、

埋めるための穴を掘るよう人に頼んだ。幸運にも、埋葬の前に、李がまだ息をしていて、口から血の泡が出ていたのに誰かが気づいた。友人たちが大急ぎで彼女を南京大病院に運び込み、医師が彼女の三七ヶ所の銃創の傷を縫合した。その晩、意識を失っている中で、彼女は流産した。

どのような経路を通ったのか、李の戦いの話は夫の耳に達し、彼は軍に三ヶ月の休暇を願い出て、南京に戻るために借金をした。一九三八年の八月に、彼は南京に戻り、腫れ上がり傷だらけになった彼女の顔を見た。彼女の頭の、生えてきた濃い毛髪は刈り込まれていた。

このときの傷は、一生涯続く苦痛と困難を彼女に課すことになった。彼女の鼻の脇に開いたままになった傷の穴からは粘液が漏れ出し、悪天候や病気のときには涙が溢れ出した（日本兵は彼女の白眼の部分で銃剣で突き刺したにもかかわらず、奇跡的に彼女は失明しなかった）。鏡を覗くたびに、彼女は一九三七年一月一九日の恐ろしい日を思い出させる傷跡を見た。「五八年経って、今では皺が傷跡を蔽っています」。南京の彼女のアパートを訪れた私に彼女は言った。「しかし、若い頃には、私の顔の傷跡ははっきりしていて恐ろしいものでした」。

李は、彼女の手柄と、独特の家族背景が彼女に戦おうとする意思を与えたのだと信じている。幼い頃から従順であれと教えられる他の中国人女性とは異なり、彼女の育った家庭には女性的な影響がまったく欠けていた。母親は彼女が一三歳のときに死んだので、彼女は無骨な軍人の家族の中で成長した。父、兄、そして叔父や伯父はみな軍人か警官で、その影響によって彼女は勝気なおてんばになった。若い娘としての彼女の気性は非常に激しく、父親は中国武術を教えなかった。明らかに、彼女が近所の子どもたちに乱暴することを恐れたからである。六〇年に近い年月が過ぎ、多数の子どもや孫たちに囲まれ、

彼女は健康と生きる情熱を強固に保っている。近所では気難し屋と評判されているほどである。ひとつ、悔しかったのは、父親から中国武術を学んでいなかったことだと彼女は言う。そうでなければ彼女は、あの日、三人の日本兵全員を殺す快感を味わうことができたかも知れなかったのにと。

死者数

南京大虐殺では何人が死んだのだろうか？ 南京大学歴史学教授マイナー・シール・ベイツが極東国際軍事裁判で死者数の推定値を尋ねられたとき、彼は答えた。「その質問は大変大きなもので、私はどこでそれが始まったのか知りません……この殺害行為全体は余りにも大きく広がっていて、全体像を示すことができません」。

中国の軍事専門家劉方楚は四三万人という数字を提示した。侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館の職員や一九四六年の南京軍事法廷の検察官は、少なくとも三〇万人が殺されたと主張する。東京裁判の判決書は、南京で二六万人以上の人々が殺されたと結論づけた。日本の歴史学者藤原彰は、約二〇万人という数字を挙げている。ジョン・ラーベは系統的な死者数の計算を行わなかったし、虐殺がまだ続いていた二月に南京を去ったのだが、彼は五万人から六万人が殺されたと推定した。日本の文筆家秦郁彦は、死者数の範囲は三万八千人から四万二千人までだと主張する。日本には他に三千人という低い数字をあげる人もいる。一九九四年に、かつて日本が「満州」に所有していた鉄道会社から、一九三八年の一月から三月までの間に、ひとつの埋葬部隊だけで三万以上の死体を投棄したことを明らかにする書証が発見された。

おそらく、江蘇省社会科学院研究員の孫宅巍^{スンツァイウェイ}ほど純粋な統計研究を行った者はいないだろう。一九九〇年に書いた「南京大虐殺と南京の人口」と題する学術論文の中で彼は、人口統計の資料に基づき、日中間の敵対状態が発生する前の南京の人口は一〇〇万人を超えていたと分析した。中国の公文書、中国軍将校の回想、および赤十字南京分会の報告書に基づき、孫は、日本軍の占領当時、市内には少なくとも五〇万人の長期居住者がいて（それ以外の人はすでに市を去っていた）、九万人の中国軍兵士、数十万人の避難民がそれに加わり、全体でおよそ六〇万人、むしろ七〇万人程度の人がいたと結論づけた。

孫は第二の論文で推定値を明らかにした。南京市公文書、中国第二歴史档案館には、家族が私的に行った埋葬や、地方の慈善団体、あるいは日本の傀儡政府の支配下にあった南京自治委員会が行った埋葬の記録がある。孫は、これらの記録を注意深く精査した後、南京の慈善団体の埋葬は少なくとも一八万五千体、家族の私的な埋葬数は少なくとも三万五千体、そして日本軍が支配していた地方政府の埋葬数は七、四〇〇体を超えていたことを確認した（埋葬記録の一部は非常に詳細で、犠牲者の性別や投棄されていた地区などの項目も記されていた）。中国の埋葬記録だけを使用して、彼は南京大虐殺の死者数が二二万七、四〇〇人を超えていたと計算した。

しかしこの統計値は、孫の論文の四〇年ほど前に日本軍の捕虜が記した驚くべき告白を勘案すると、さらに膨れ上がる。一九五四年、遼寧省北東にある撫順戦犯管理所で審判を待っていた日本陸軍の太田寿男少佐は四四ページの供述書を提出したが、その中で彼は、日本軍が焼却、埋葬、あるいは投棄を行って、大量の死体を処理したことを自供した。ほとんどの死体は、南京北西の下関からのものだった。あの河岸地区では、日本人は待機する船に五〇体ずつの死体を積み、川の中ほどまで運んで水中に投げ棄

てた。死体はトラックで別の場所に運ばれ、虐殺の証拠を隠滅するために焼却され、埋められた。太田の部隊は、一九三七年一月一五日からの三日間で、中国人の被害者の一万九千体の死体を揚子江に投棄したが、そのとき、隣で作業していた別の部隊は八万一千体を処理し、他のいくつかの部隊が五万体を運び去った。総数で一五万ほどになる。孫は、中国の埋葬記録からの統計値に太田の数字を加えて、死体の総数が三七万七、四〇〇人という驚くべき値に達するという結論を出した。この数は広島と長崎の原爆投下による死者数の合計を上回っている。

たとえば、懐疑主義者が太田の自白が虚偽だと否定し彼の証言を無視したとしても、南京の埋葬記録によつて、虐殺の死者数はどんなに低く見積もつても二〇万人台の範囲にあるという確実な証拠が提供されていることに留意しなければならない。孫の研究は、極東国際軍事裁判の記録から私が探し出した証拠書類（表4・1参照）によつても傍証することができる。慈善団体の見積埋葬数（後に孫の論文で言及されている）と、他の個人が数えた死体の数（孫の論文では言及されていない）とを足し合わせて、法廷は南京大虐殺で約二六万人が殺されたという結論を出した。極東国際軍事裁判の数字には、死者数は三〇万人台から四〇万人台にまで押し上げることになるかもしれない日本側による中国人の死者数の埋葬統計が含まれていないことは重要である。

近年、他の学者が孫の研究を支持し、南京での死者数が三〇万人を超えていたのではないかという議論の根拠を提示している。たとえば、南イリノイ大学の呉天威^{ウーティエンウエイ}歴史学名誉教授は、彼の *Let the Whole World Know the Nanjing Massacre*（全世界に南京大虐殺を知らしめよう）という論文の中で、陥落直前の

表 4・1 日本の南京大虐殺の推定犠牲者数

崇善堂.....	112,266
紅卍字会	43,071
下関地区	26,100
魯甦氏の陳述	57,400
朱、張、楊氏の陳述.....	7,000以上
呉氏の陳述	2,000以上
無名犠牲者の墓碑の記述.....	3,000以上
合 計 (概数)	260,000

出典:文書番号 1702、箱番 134、極東国際軍事裁判記録、法廷証拠、1948年、第二次世界大戦、戦争犯罪資料集、項番 14、記録グループ 238、米国立公文書館。

市の人口はおよそ六三万人だったと推定する。彼が提示したこの数字は正確な値とはいえないが、相対的には実数に近いものだろう。死体の数についての詳細な歴史的研究資料を示し、数値を注意深く検証した後に、彼は南京大虐殺の死者数は三〇万人を超えていたという結論を導く。その数はおそらく三四万人で、そのうちの一九万人は集団で殺害され、一五万人は個別に殺害されたとする。

文筆家のジェームス伊^{イン}と史咏^{シーヨ}の両氏も、独自の研究を行った後に、同規模の数字、つまり約三五万五千人という数字を導き出した。彼らの数字はすでに推定死者数の最上位のものになっているが、伊^{イン}と咏^ヨは、南京で殺された人々の実数は彼らが発掘することができると信じている。死者数の統計には相当数の重複があると信じ、たとえば日本人が川に投棄した死体の多くは岸に漂着し、再び埋葬され、死体として二度数えられたのではないかと示唆する他の専門家の議論を、彼らは否定す

る。陸地に打ち上げられた死体というものは、川から遠くに離れた場所に埋められるのではなく、川のほとりに埋められるはずである。しかし、彼らの調査研究によれば、ほとんどの埋葬地は揚子江から何マイルも離れていた。彼らは、外にさらされていたために腐敗が進行している死体を埋葬するために野を越え山を越えて輸送するというのは常識に反していると論じる。さらに、伊と咏は生存者への聞き取り調査を通して、強姦や殺人の被害者の家族は、通常、被害者の死体を急いで埋めてしまい、当局への埋葬の届出は行わなかったという事実を発見した。彼らの研究は、個別的な手当たり次第の殺人ではなく、大量殺人の報告書を対象にしているので、伊と咏は南京大虐殺の死者の総数は十分に四〇万人台の範囲になるだろうと信じている。

大虐殺の時期に、日本人自身が南京の死者数が三〇万人になると信じていたことを示す決定的な証拠もある。この証拠は、日本人自身の側から発せられただけでなく、殺害行為が終息したとは到底いえない虐殺の最初の月に発せられたという点で、重要である。一九三八年の一月一七日に、廣田弘毅外務大臣は東京からワシントンD.C.の連絡員に次の電文を転送したが、それをアメリカの情報機関が傍受し、暗号を解読してから、一九三八年二月一日に英語に翻訳した。

数日前に上海に戻ってから、私は南京やその他の地区で日本軍によって行われていると報告されている虐殺行為を調査した。信頼できる目撃者の口頭の説明と、信頼性について疑念の余地のない人たちの手紙により、日本軍がフン族のアッティラを思わせるような態度で振舞ってきて、現在もそういう風に振舞っているという確証を得ることができる。三〇万人を下ることのない中

國の民間人が殺戮された。そのほとんどは血も凍るようなことだ。

一月に蒋介石が南京から政府のほとんどを疎開したときに、蔣が彼の軍を引き上げて都市を無防備な状態にしていたならば、恐らくあの大きかりな虐殺は避けられたのではないかという仮説は、よく語られ、説得力がありそうに見える。しかし、少し考えてみれば、この議論の弱点が見えてくる。いずれにしても、日本軍はその数ヶ月前から、南京へ進軍する経路で組織的に村や都市を破壊し、同じような虐殺を他の場所でも行っていたのである。明らかに、彼らは自らの行為について、中国人の挑発を必要としていたわけではないのである。

中国兵がまったくなくなつた都市は、少なくとも、民間人の中に隠れている兵士を取り除くために系統的な処刑が必要だつたという日本人の言い訳の根拠を奪つたということだけは確かに言えるだろう。しかし、それによつて彼らの行為が変わつたという根拠は何もないのである。

また、蒋介石が意味のない南京からの退却命令を出さず、最後の一人まで市の防衛のために戦つていたら市の運命は違うものになつていたかもしれないという仮説も語られがちである。しかし、我々はここでも慎重にならなければならない。一対一の白兵戦は機能しなかつただろう。日本軍ははるかに優れた武器を持つていたし、よく訓練されていたのだから、遅かれ早かれ中国軍を打ち負かしたはずである。しかし、遊撃戦の戦術に基づく長期の戦闘を引き伸ばせば、日本軍の士気を喪失させ、中国軍のそれを高揚させることができたかもしれない。少なくとも、もつと多くの日本兵が中国兵との戦闘で死に、激しい抵抗によつて彼らの中国兵に対する傲慢さが封じられることにはなつただろう。